
姫様とにんじんとそれからと・・・

きらきら星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姫様とにんじんとそれからと・・・

【著者名】

あらわらり

NZマーク

N1786F

【あらすじ】

イラスト小説企画『小説風景1・2選』の10月分です。下のイラストのキャラが出てくるお話しです。

(前書き)

この話は『姫様とオムライス』のその後の話となっています。
そちらを読んでいただいてからの方が楽しく読んでいただけると思
います。

『誠君へ。つまらない生活に飽きたので現実逃避の旅に出ます。困った時は特別にブタさんの貯金箱を割ることを許してあ・げ・る。来月には帰ろうと思っているわよ。そういう、お家のお掃除お願ひね。貴方を愛するママより』

丸っこい文字が書かれた手紙を丸めてゴミ箱に投げ入れた。つい数日前にようやく帰ってきたのにまた旅に出て行った育児放棄の両親。まあ、我が家ではそれが普通であり変わった話ではないのだが。俺は冷蔵庫を開けてカツプラーーメンを取り出して夕食の準備を始めることにした。母親は時々冷蔵庫にカツプラーーメンなどを入れる癖がある。生麺生麺と歌いながら冷蔵庫に入れる母は本当にカツプラーーメンの意味を分かっているのか怪しい所だ。それに、わさびのチユーブに並んで歯磨き粉が混ざっているのも母の感覚を疑いたくなるものだ。わさび・からし・イチゴ味と並んでいると違和感はないが、間違つたらどうしてくれるんだと思う。まあ、旅に行つてゐる間に片付ければいいだけの話しながら。

それにも味気ない食事になつたものだ。つい先月まではある女性が週に2・3度は食事を作りに来てくれていた。だが、ここ最近はまったく来なくなつてしまつた。元々気まぐれで自分勝手な子だったからいざれかは来なくなると思っていたが、いざこなくなると寂しいものだ。

まあ、この家に彼女が来なくなつたと言つことは彼と上手くいつている証拠なのだろう。そのあたりは心から祝福してやるべきことだ。

「ピンポーン」

生麺のカツプラーーメンを半分ほど食べ終えた頃、鳥肌が立つよくな音が家の中に響いた。元々来客の少ないこの家に来る客と言つた

ら俺頭の中にはあの女性が真っ先に浮かんだのだ。

彼女に埋め込まれた教育、だらうか呼び鈴が聞こえてすぐに玄関へと駆けつけた。

「はい、今開けます」

彼女かなと思つて期待したものの、そこにいたのは宅配のお兄さんだ。

「星川宅急便です。サインお願ひします」

がつくりと肩を落としながらも伝票にサインをして受取人と差出人を見た。

受取人は俺だろう正確には『庶民の子』と書かれている。それで差出人は……姫様。差出人側は名前だけで住所は書かれていなかつた。それに、内容が書かれている欄には『おいしいもの』とだけ書かれている。気軽に受け取りのサインをしたもの。彼女は一体何を送りつけてきたのか不安になつてきた。

「では、こちらですね」

すると、ガタガタと台車に乗せられた大きな箱が玄関先に運ばれてきた。大きさとしては中に洗濯機が入つても驚かないぐらいの大きさで、その大きさで家の玄関を埋め尽くした。

洗濯機か冷蔵庫辺りが入つていそうな箱だが『クール便』というステッカーが貼られている。

中身は生ものなのだろうか。彼のことだ数週間分の食事を送りつけてきてもおかしくはないだろう。

とりあえず、今度彼女が来た時のお礼をどうするか考えておくことにしよう。彼女はそのあたりの礼儀にはかなりうるさい人だからな。

そんな彼女から送られてきた大荷物を家の中に運び込もうと持ち上げようとした。だが、箱の大きさと同じでかなりの重さがあり少し浮きあげるのがやつと言つた所で引き摺りながらの移動しかできそうなさそうだ。

「生ものでこの重さ。なに送りつけてきたんだあの人は。冷凍のマ

グロだつたりして

生ものだからそのままにして置くわけにもいかず、何重にもかけられた紐を解き箱を開けて中を確認してみることにした。

中身は一面のオレンジ色。細長く硬そうなニンジンが隙間なくびっしりと埋め尽くされている。どのニンジンも真っ直ぐで色鮮やかで不味そではないので文句は言えない。だが、この巨大な箱の中身が全てニンジンだとしたら嫌がらせと言わせてもらいたい。

「ほかに何か入っていないのかよ。手紙とかさ……」

ニンジンを搔き分けてほかに何かないか探していると、白くて長いものを見つけた。初めは大根かと思ったが大根より細くて何より毛が生えている。不気味だがそれを突いてみたが反応はない。さらに握つてみた。フサフサで肌触りのいいその白いものは暖かく生き物のかのようだ。

俺は未知との遭遇を期待しながらそれを思いつき引き抜いた。すると、ニンジンを搔き分けて現れたのは女の子だ。緑色で短い髪に赤い瞳、それだけでも日本人ではない。さらに、彼女が着ている服はなぜか巫女服だ。それも、その巫女服はこの肌寒い季節に袖がないもので腕は露出している。

そこまで十分普通じゃないのに俺の握っているのは彼女の耳。おそらく兎の耳だろう。俗に言つウサミミのコスプレかと思つたが、しつかりと頭から生えている。

「はうは、はうは

耳を引っ張られニンジン地獄から引っこ抜かれたうさ巫女は涙目で俺を見つめながらはうはう言つて鳴いている。これがウサギの鳴き声なのだろうか。

「う、ごめんなさいです。もう、姫様に逆らうようなことは言わないのです」

ああ、姫様がらみの子ねなるほど。

「俺に謝られても困るからさ。とりあえず……

「へ？」

俺はそのうさ巫女をそつと一ソジンの詰まつた段ボール箱へと戻しふたを閉めた。

「ちょ、ちょっと待つてください。あ、開けてください。お願ひします。もう、寒くてガタゴトは嫌なのです。これ以上冷やされたらアイスキャンディーになっちゃうんです」

悲惨な女の子の声がする箱のふたを少しだけ開けてみた。すると、うさ巫女は俺の顔を涙を流しながら見つめてきた。

「ちなみに、何味のアイスになるんだ?」

「ええっと……こ、ニンジン?」

「そう、それは美味しそうだな」

彼女に優しい笑みを見せてふたを閉めた。さらに、引き摺りながら玄関から運び廊下の隅へと移動して紐で再び縛つてその上に手近にあつた電話帳を数冊乗せた。

「さてと、飯の続きをするか」

俺はガタガタ揺れながらはづはづと鳴き声をあげる箱を廊下に置き去りにして夕食に戻ることにした。

「ピンポーン」

夕食を食べ終えて、馬鹿騒ぎしているテレビ番組を見ながら一時間ほど経つたころだ。お客が来た。時計を見ると、22時丁度だ。正直世間知らずな客だなと思いながら出向くことにした。

「ピンポーン」

再び急かすように呼び鈴を鳴らされたのと同時に玄関の鍵を開けてお客の姿を確認することができた。

「どちら様ですか」

「夜分遅く失礼します」

ぴつたり60度の角度まで頭を下げていたのは女の子だ。顔を上げた彼女は俺のほうを見上げるように見てきた。背は小さいがどこか大人びた顔。薄い青色の長い髪の毛と赤い瞳を持った子で魅力的な何かを持っていた。

だが、この子はなぜかフサフサのウサギの耳と巫女服、それも肌寒いこの季節に袖がない巫女服だ。この子の感覚と羞恥心を覗いて見たいものだ。

「五十嵐誠さんですね」

「そうだが、新聞の勧誘と自然の香りがする野菜の宅配なら帰つてもらえないか

「いえ、そのような怪しいものではありません」

俺の目からしたら彼女はすでに十分怪しいんだが。自分のことを一般人だと思っている彼女は袴に手をいれ何か探しているかのようにゴソゴソと探つてゐる。そして、出されたのは白い封筒だ。

「姫様からのお手紙です。用件はそこに書かれています」

渡された姫様からの手紙の封筒には何も書かれてなかつた。無造作に封筒を破つて中から一枚の便箋を出して読んでみた。

『拝啓。庶民の子、その子を飼え。敬具』

文字少な。便箋の真中一行で書かれたそれは工口とか無駄遣いとか知らない人の手紙だ。俺の母親よりは達筆な字で手紙らしいが挨拶の文字がなく用件しか書かれていなくて物寂しい感じがする。

「と言つことなので、これからお世話になります」

再び頭を深く下げた彼女を俺が面倒見ることになつたようだ。まあ、あの身勝手で自分中心の姫様なら考えられないことでもないのだがな。

「とりあえず、詳しい話も聞きたいし上がりなよ」

姫様の知り合いで悪い子じゃなさうなので俺は家に上げて話を聞くことにした。

青い髪のうさ巫女は、リビングのソファーの上で正座をしている。緊張しているのか背筋を直つ直ぐにしたまま部屋中をキヨロキヨロと首を動かして観察している。

「粗茶だが、どうぞ」

うさ巫女の前にお茶を出すと、小さく頭を下げた彼女は音を立て

て俺の入れたお茶をすすつた。だが、すぐに嫌そうな顔を見せた。

「本当に不味いですね。排水溝の臭いがします」

彼女は湯飲みを置くと軽く咳をして床に正座をして三つ指を着いた。

「いつ終るか分かりませんが、姫様がお帰りになるまでお世話になります」

「あ、こちらこそよろしくお願ひします」

改まつてお願いされた俺もつられて頭を下げていた。よく考えず許可してしまつたが良かったのだろうか。まず両親の許可は要らないだろう。こんな可愛い子なら父はすぐにOKを出すだらうし、母だつて娘ができたと騒いで嬉しがるだらう。

……特に問題はないのか？まあ、あつたらあつたでその時考えるか。それに、困つている子は助けなければならぬよな。

「で、姫様とはどんな関係なんだ」

あの人は大統領とゲートボール仲間だと聞いても驚きはしないが、こんなウサギの耳を生やした子とはどんな関係かと興味があつた。

「私は姫様のペットですが」

「ペット……でも君つて女の子だよな」

「ええ、雌のうさぎですがなにか。だからと言つてよからぬ考えは起こらないでください。汚らわしい庶民の子が相手などダンゴ虫を夫にする方がよっぽどマシです」

俺、怒つていいのかな。この子殴つてもいいのかな。世の中には言つていい事と言つたくても言つてはいけないことがあることを教えるべきなのかな。

「でも、どうして姫様のペットを俺が預かることになつたんだ」

「姫様が夏彦様と喧嘩をしてしまい、姫様が家出をしてしまつたのです。放浪の旅に出た姫様にとつて私はお荷物になるのでこちらでお世話になるよう言われたのです。姫様に迷惑をかけるぐらいなら豚小屋でも我慢して生きていけます」

旅行中ペットを預けるような感覚で彼女を押し付けられたようだ。

それもいつまで預かればいいか分からない。まつたく、自分勝手な姫様だ。

「預かるのは分かったけど、俺は具体的に何をすればいいんだ」そもそも俺は彼女を人間として見ればいいのかうざぎとして見ればいいのかすら分からない。

まあ、人間の女の子としてみるならとも可愛い子だ。少し恋心が芽生えてもおかしくないだろう。でも、うざぎをそんな目で見ている俺は特別な施設に閉じ込められてもいいような気分になつてく

る。「何もしてくださらなくとも結構です。むしろ何もしないでください。その汚い手を近づけてこなければ私はそれだけで満足です。欲を言つならその臭い息を1000年ほど止めていてもらえますか。うざぎにとってストレスは死活問題なのです」

さつきからちょくちょく聞こえる毒舌に引っかかるつていたが、姫様のペツトなら当然かとも思つていた。

それにしてもあの姫様が飼つていたにしては育ちが悪いきがする。言葉遣いは確かに丁寧なのだが、状況に応じて話してよいことを見極めることを学ばせるべきだ。

「で、でもよ。食事とかはどうするんだ」

この家の家計の財布を預かっているのはこの俺だ。うざぎの食費にいくら掛かるかは知らないが、普通に暮らしていくも豚さんの貯金箱を割らなければならないほど厳しくなるかもしれない。

「そのあたりはお構いなく。庶民の子に貧相な食事を分けてもらわなくても問題はありません。私の荷物が届いていませんか」

そういわれて俺の頭の中をオレンジの集団が横切つて行った。なんと言う準備の良さだろつ。俺が彼女を家に置くことを前提としていたようだ。それに、彼女を家に置くことを断つたとしてもあの姫様なら聞く耳を持たず無理にでも飼えというかもしねりない。

「それなら、廊下にあるけど。一応確認のために中を見せてもらつたよ」

「別にかまいませんよ。庶民の子に知られても何とも思いませんから」

そう毒づくと巫女はリビングを出て行った。俺も彼女の後ろについてリビングを出た。その時の俺の頭の中には何か忘れていて引っかかる何かがあった。

「そうそう、これです」

青い髪のうさ巫女は俺が縛った紐を苦戦しながらも解いていた。そして、彼女が箱を開けると緑色の物体が飛びってきた。

「お姉さま。会いたかったよ」

そう叫びながら飛び出てきた緑色の髪のうさ巫女を簡単に避けた青い髪のうさ巫女は床につぶれてはしづら泣いている妹に冷たい目を向けていた。

「私は貴方を妹だと認めたことはありません」

「そ、そんなあ。姫様にもお姉さまにも見捨てられたらあたしは誰を頼ればいいの」

「知りません。馬鹿なうさぎは刃で餅でもついていればいいんですね」「はうう、そんなあ」

姉にすがりつく緑髪の妹。なんだか可哀想に見えてきた。二ンジン詰めの箱に押し込められて寒いトラックで運ばれてきて姉には拒まれている。な、なんて幸の薄い子なんだろう。

「ところでさ、二人は姉妹で間違いないんだよね」

そう俺が聞くと妹の方はすぐに頷いたもの姉の方はすぐに首を横に振った。

「いいえ、これは非常時の資金源ですけど」

青い髪の姉にそう言われて驚きを通り過ぎて涙を流す緑髪の妹。非常事態のときはこの子は売られてしまうのだろうか。

「この国には姫様のお友達がいるとか。ええっと、この住所にこの

子を送れば沢山お金をくれる人がいると言わっているのですが」

姉に見せられたメモにはこの国で最も有名なある人物のいるであ

ろう住所が書かれていた。本当に姫様と知り合いだつたようだ。

「つて、そんなことしたら駄目だからな」

「そうですか。なら、こんな役立たずの馬鹿なつをはは外に追い出

すことにしましょう」

姉は妹の耳を掴むと引き摺りながら玄関へと足を進めていた。

「い、いや、許してくださいお姉さま。もう、あんなことはしませんから」

あんなこととはどんなことなのだろう。

「私はそんなことで怒っているのではないのです」

一度優しい声に戻った姉に妹は希望の眼差しに戻っていた。そして、姉は妹と同じ目線にまでしゃがんで頭を撫でた。

「お、お姉さま……」

徐々に明るくなる妹の表情に優しい笑みを見せていた姉は、いきなり真顔に戻った。

「私は、貴方の存在自体に嫌気がさしているのです」

そして姉はまた妹を外へ追い出そうと引き摺りはじめた。

「そ、そんなあ。あたしもこの家に置いて欲しいのです」

「それは、庶民の子に迷惑です。それよりなにより、そんな恥辱私が耐えられません」

はうはう騒ぎながら引き摺られる妹。あの子は姉と違つて姫様にまったく似ていよいよだ。

「ああ、もう、二人ともこの家で暮らせばいいから喧嘩しないこと。守れないなら一人とも出て行つてもらうよ…………はあ、疲れる。とにかく、ええつと、何て呼べばいいのかな」

二人に会つてからかなりの時間が経つたが、まだ名前すら聞いていなかつた。

すると、姉がむくれた顔をして握つていた妹の耳を離してそっぽを向いたまま自己紹介してくれた。

「私はうさ子。できれば私のことは呼ばないでくれると嬉しいです。庶民の子に名前を呼ばれるだけで背筋がゾクゾクするし吐き気もし

ますから」

姉によつやく耳を放してもらつた妹は頭を撫でてから立ち上がり元気よく手を上げて自己紹介をした。

「あたしはね、ぴょんちゃんつていうの。よろしくね誠兄。誠兄はあたしのこと、ぴょんちゃんつて呼んでいいよ」

青い髪の毒舌な姉がうさ子、緑の髪で泣き虫な妹がぴょん子。

「あのせ、もしかしてその名前つて姫様が付けたのか」

「そうだよ。えへへ、可愛い名前でしょ」

ぴょん子がはじめて笑つた。その表情は自慢げで相撲氣に入つている名前のようだ。

そんなぴょん子には悪いが、姫様……センスがないなあ。うさぎだから、うさ子とぴょこん子か。もう少し女の子らしいセンスを持つうよ姫様。

「まあ、部屋は余つてゐるし別にいいが。これからよろしくな。うさ子とぴょこん子」

うさ子はそっぽを向いてしまつたがぴょん子は明るい返事をしてくれた。

一人暮らしには慣れていたけど、一人より三人のほうが楽しい生活ができそうだ。

「そうでした。最後に夏彦様からの伝言がありました」

「人をつれてリビングに戻ろうとした時、うさ子が思い出したかのように立ち止まり振り返つた。

「フラグが沢山立つたからって慌てずに着々と、同時攻略など考えず一途に貫いてこそ男だ。だそうです。意味はよく分かりませんが」俺は夏彦からの伝言に苦笑いをしながら今後起ると思ついろんな非日常を楽しみにしながら一人を暖かく預かることを再度決意していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1786f/>

姫様とにんじんとそれからと・・・

2010年10月8日15時16分発行